

農家の庭

明道 博

住宅の庭は家屋の一部であるというふう

に考へて、はじめてその眞価が發揮されるものである。われわれは家屋の建築に際していろいろと間取り、採光、間敷あるいは各部屋の広さ等を考へる。それと同じように、庭に対しても適正な広さ、園区の分配ということ考へ、庭と家屋内部との連絡が便利であつて且つ實際の用途に適合しているということが求められる。庭は元來美しくなければならぬが、その美しさを觀賞するのは主として家人であつて、特に家庭の人が便利に觀賞できるようにでないといけぬし、また日常生活、あるいは仕事に差支へのあるようにならぬに位置取つていて都合がわるい。

したがつて、家屋建築でもさうであるように、庭は初めの設計が大事である。そしてこれを設計するに當つては、前述のように凡ゆる点から合理的に過不足のない設計がなされるべきである。大体、農家の庭と言つてみたところが、美しい庭を作る点においては普通住宅の庭と異なるところが無いわけであるが、ただ、日常生活の仕方及びそれに伴う仕事の種類が農家と普通家庭とは全く異なるし、また住宅の位置か

ら言つても、都会のそれとは全然ちがう。

このために、農家の日常生活に適合した庭の設計は、結果として普通家庭のそれとは著しく違つた構図を現わしてくる。

先ず農家は、広い耕作地を擁し、その中の一部を劃して家屋をはじめ納屋、取納庫等を容れる居住の拠点としての構えを形造つてゐる。したがつて農家の住宅地の設計は、先ず家屋の位置の撰定からして普通住宅地と異なつた考へから出發しなければならぬ。

他の条件は別として、農家としては耕作地を最も能率的に利用し得る点から、耕地の真中に住居を構へるのが合理的と一応考へられるが、日常生活の利便の点からはできるだけ主要街路に近い方が便利ということになる。これら双方の要求に依じて一般に適當とされてゐる位置は、街路から幾分奥まつた位置ということになる。勿論、農業経営の内容によつて種々な程度の修正が行われることはまぬかれぬ。

次に農家は、普通、大家畜、小家畜を飼養してゐるから、これらの畜舎が必要である。また、それら家畜の運動のための余地も附屬せしめねばならない。次にこれらの

家畜に要する飼糧庫を必要とするし、この他、車庫、農具庫等も必要であり、脱穀その他の調理器械とその設置倉庫を必要とする。すなわち、これら一経営を支えるための単位として必要な設備が、地方により経営形態により決つてくるから、これらを用意した家屋敷地としての一區劃が決つてくるわけである。位置の撰定に次ぐ敷地設計はこれを基礎として進められる。

先ず季節風並びに冬の寒風に対しては、風向に随つて常緑樹による囲いを境界に設けるべきであらう。次に、前に挙げたことき種々の建物を配置する場合、最も便利で且つ合理的な方法は、コ字型であるとされている。この中央は広場として取り、開口部は東か西、あるいは南東か南西に向け、建物の南側に、家畜・家禽の運動場、觀賞園等が設けられるようにする。建物の中、畜舎並びに動力を使用する建物は連続せしめず、とくに畜舎は住居より離れて位置せしめるようにする。これは蠅蚊のわずらわしさや火災による危険を防ぐためである。

このように農家の住居敷地設計として、日常生活、営農作業に必要な敷地を過不足なく取つて、これを適正に配置することから始めなければならぬ。これが適正を欠くと、日常終始不便をかこち、また觀賞園のごときは常に改造、位置変更ということを余儀なくされ、決して美しい楽しい觀賞園とはなり難い。

凡そ以上のごとき注意をもつて敷地劃が行われた場合、実用園区を取り去つた敷地が觀賞園としての敷地となる。従来の北海

道農家には觀賞園としての園区は勿論、他の実用園区に対してもその配置、広さにおいて適正を欠くものが少からず見当る。觀賞園としては入口から玄関までのいわゆる前庭と後庭と分けて考へた方が設計上から言つても、また出来上りの見ばえの点からも結果がよい。これらの中、前庭は家屋群を美装し、外來者に対しては第一印象を与えるところであるから、したがつて農家に相応しい設計をなすのが好ましく、いたずらに門戸を飾るといふ趣味はよくない。なるべく田園的な親しみのある、あつさりとした設計を与えるべきである。このためにはロインと樹木とを主体とし、玄関前に至つて僅かの花物を配する程度でよい。無暗に車廻しの中央に奇岩珍木の類を寄せ植へるといふことは、あまり感心しない。

次に後庭であるが、これは思い切つて明朗な、色彩的に華やかなふに仕上げるべきである。これによつて家人の園芸趣味を満足せしめ、また日常生活の慰安に供し、仕事に疲れた心身の保養に資すべきである。農家は都会地より離れて位置するのが普通であつて、したがつて一部に切花用の床も設け、また果樹や高級蔬菜は手間のかかるものが多いから、その培養床も後庭の一部に附け加えるべきである。かくして培養に高度の技術を必要とするものであつても、いやしくも農産物であるかぎり自給自足を建前とし、もつて日常の食生活を豊かにし、かつ新鮮な花卉をもつて室内の裝飾をも考へたいものである。後庭の中でも以上の園区は実用的なものであつて、その広さは家

族の人数、年齢、必要度を考えて、適当な坪数を与えるのであるが、真の観賞園区とは性質が幾分か異なるから、これを生垣あるいは格子のごときのもので引き離すのが建前であつて、植栽法そのものも土地の最も経済的な床植とすべきである。

後庭は観賞園を主体として、これに以上のごとき実用的な園区を若干包含するが、その位置は前にも述べたごとく南面あるいは東南面とするを最も適当とする。しかし遠山の眺めとか、広い耕地の眺めとか、あるいは湖水等の眺望美しい方向を撰んで居間の窓あるいは縁側を設け、その前面に観賞園を位置せしめる。観賞園の真価は、部屋に居て眺めるだけでなく、庭園内に足を運んで観賞する場合最も發揮されるものであるから、したがつて部屋から直ちに庭に出られるふうな設計を与えるべきである。庭は決して単独に作られてはいけないのであつて、その庭の目的が日常生活に則して最高度に利用されることとなければならぬ。観賞園も同じ理窟である。

さて観賞園は、近代的趣味からすれば、全体が明るく、色彩的に豊富であることがのぞまれ、また農家の庭としては、困苦しさを避けて田園的浪漫的という嗜好がふさわしい。次に観賞園は、四季を通じてその美しさが發揮されることが望まれる。以上の設計意匠上の方針を頭に入れておいた上で、観賞園の維持管理のための労力並びに費用の点につき一考することが大切である。農家の庭としては、自家労力をもつてこれを維持することが普通であつて、した

がつて管理に多大の労力を要するとき設計を与えるならば、美しかるべき庭もたちまち荒廃してしまふから、かかることのないように庭の内容、広さを決めることが大切である。

およそ庭の構成要素として労力要求度の大小を考えてみると、道路面積の広いこと、一、二年草(あるいは同じ取扱いをするもの)花卉の植込面積の広いこと、整枝、剪定を必要とする花木類の多いこと。水面(池、プール等)の多いこと等は労力を多く要する条件となる。一方、宿根草の植込面積多く、ローン面積広いことは労力上経済的である。大体以上のような注意を頭において観賞園の設計にとりかかるべきである。

四季を通じて美しいためには、一、二年草植込床を設けるといふことが目的を達する上から最も望ましい。しかし前にも述べたように、この種の床は、一年に二、三回植物を交替してやるのが前提条件であるから、すこぶる費用が嵩むことになるゆゑ面積は余り多くとれないこととなる。次に考えられるのは、宿根草を主体とする境栽を設けることであつて、この境栽は春から秋までに花期が亘るよう開花期の異なるものを群植して、長い床を形成せしめる。

この植込方法は、第二回を見て解るようになり、植物の大きさによつて同じ植物を三、十株くらいを一群として植えてゆくのであるが、草丈、色彩、草姿等を考えて、高低の変化が流線を描くように、色調は急激な変化を来さず漸次移り変わるように植込む、

宿根草は大体春から夏にかけて頗る美しいものが多いものである。したがつてこれらが咲き終ると、その部分が汚く見えてくるものである。これは已むを得ないのであるが、その部分に一年草を交替してやることにより、相当程度この欠点を補うことができる。また境栽は元来壁面や生垣等に沿うて設けられるものであるから、草丈の低いものは前方に植込まれることになる。しかし、これがあまり規則どおりにやられると、離段的になつて面白くないから、草丈低いものの数群をもつて湾入を、高いものの数群をもつて前方への突出をというふう

に目蔭にならないことを条件として前線の変化をも考えるのが巧みなやり方である。最近ではこの他に花灌木をも境栽に取入れようになつてゐる。これによつて境栽に骨が入り、がっちりした落着きを生ぜしめ得るものである。例えば、ばら、あじさい、ぼたん、にしきぎ等好適せるものの一例である。

かかる注意をもつても境栽は、一年草の植込床に比して四季を通じて美しいという点からすれば敵わないものであり、したがつて、一年草床が家屋に至近の場所に適するに對して、境栽はこれより若干離れた位置が望ましい。

つぎに農家の庭としては困苦しさを避ける意味からして、鋪装面は成るべく少くした方がよい、そしてローン面を増すべきである。殊に北海道としてはローンがよく育つ地方であるから、これを多くしてもなんら支障を来さない。緑地に飽和していると

思われる田園にあつてもローンの緑は決して飽きがこないし、また刈込んだ後は視覚的に清潔、慰安的であり触感的に頗る温和であつて、全く独特なものである。したがつてローンは家屋の近傍だと、遠方たるとを問はず適合するものである。

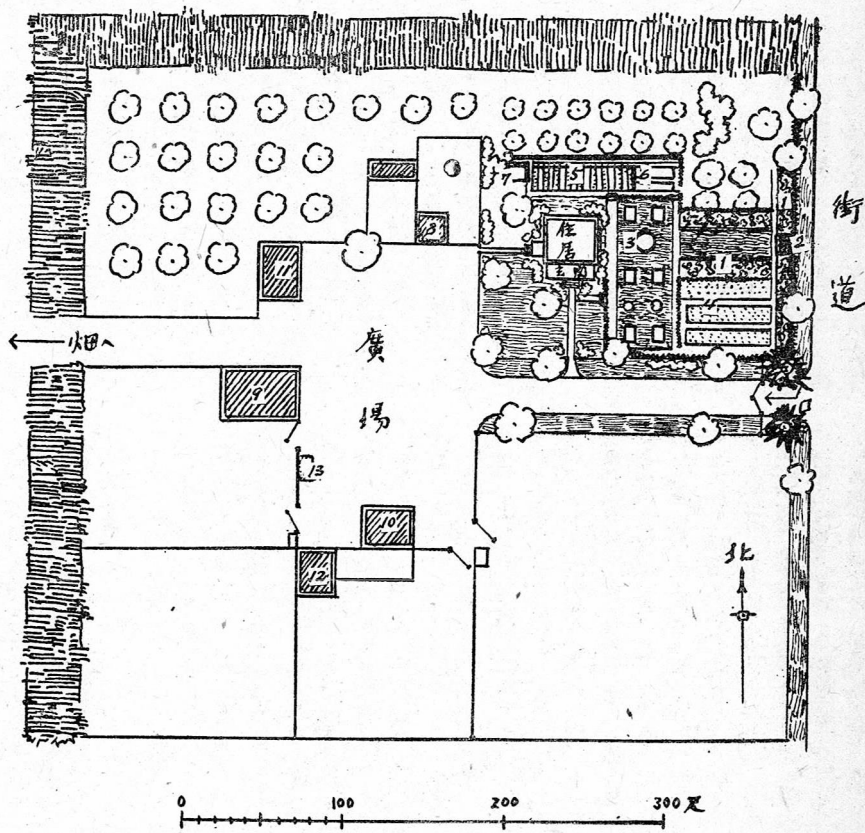
つぎに観賞園と他の園区例えば実用的な蔬菜園、果樹園等とは植樹、生垣のごときのもので遮断されるのが建前であるが、連絡は便利にできるように通路を配置する。この連絡地点には庭門、あるいは縁廊のごときものを設けるのが望ましい、これによつて区切りがはつきりするのである。しかしこれも農家の庭としては余り固い感じが出ないように、多大の費用をかけて高級なものを作るよりも、むしろ丸太材で組みあわせたふうのものがふさわしい。

さて以上で観賞園の構成に対する一般的事項に就き述べてきたから、つぎに実際の植物植込につき説明を続ける。先ず一年草植込床であるが、これに對しては、春、夏、秋と常に花が美しく咲き誇つてゐることが望まれるわけで、そのためには春咲く草花を秋の中に植込んでおき、それが初夏までに大体花期を了へるから、直ちに掘り起して、夏から秋まで咲く主として一年草をおき替へる。このためには春から温冷床を用いてそこに植込むだけの量の苗を仕立てておかなければならない。すなわち幾回かの移植を経て丈夫な苗を養成し、六月頃に植込まれる時にはすでに花蕾を着生し、間もなく咲き出す程度のものを用意する。場合によつては余り移植に耐えないもの、

あるいは相当大苗となり開花中のものを植込みたいという時には、鉢植として培養し、これを植込んでやればよい。およそ一年草で春まきされるものは、夏から秋まで連続して開花するものが多い。これらは初夏に植込めばどうやら絶えず床を飾り得るものであるが、これでは花期長く飽きがかかるという場合が少くない。また夏にふさわしい花色であつても、秋の冷涼な気候時には好ましくないというものもある。例えば夏は清冽な色彩をよしとするに對して、秋は豊麗なそれを欲するのが普通であるからであつて、このような場合には、秋口に更に一度植物を交替してやるのが理想的である。このことは、もし夏の花床に四季咲きの多年草例えは鉄砲百合のごとき球根をもつて高度の美観を呈せしめようとする場合には、是非必要となるものである。

このようなわけあいであるから、一般に春床用、夏床用、秋床用としそれぞれの季節に適當とされる花卉がある。これらは後に列記することとする。次に注意しなければならぬのは、このように花床用植物を植込む場合、その効果は主として花が表現する色彩の塊りとしての効果であつて、各株個々の容姿ということは殆んど問題にならないものである。したがつて同一植物で花色の上等のものがある程度大量に植込んで床を色彩的に塗りつぶすというふうにゆくべきで、いろいろの植物種類をこまごま植込むことは決して効果が挙げられず、また趣味的に言つても上等ではない。また花床の形であるが、これも複雑なものを設計して

(第一圖)



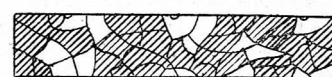
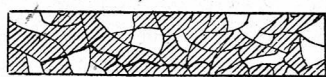
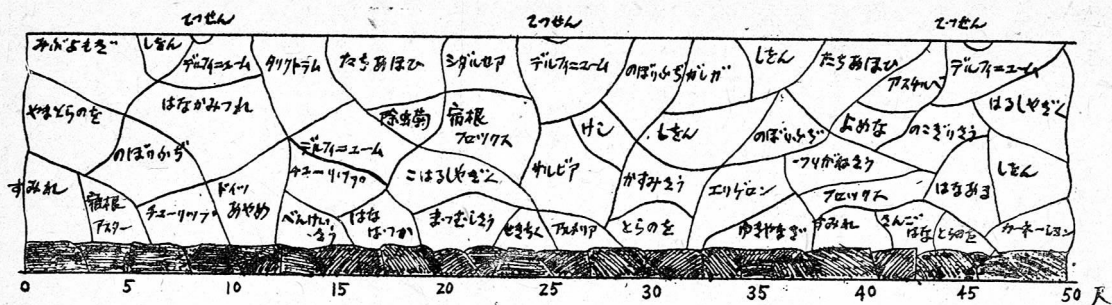
- | | | |
|----|---|---|
| 1 | 境 | 栽 |
| 2 | 籬 | パ |
| 3 | 花 | ー |
| 4 | 切 | ゴ |
| 5 | 花 | ラ |
| 6 | 用 | レ |
| 7 | 花 | ー |
| 8 | 菜 | 置 |
| 9 | ム | 場 |
| 10 | 庫 | 庫 |
| 11 | 畜 | 畜 |
| 12 | 畜 | 畜 |
| 13 | 水 | 水 |

見たところで形そのものから發揮される効果といふものは先ず殆どないのであつて、簡単な形で足りすべきである。以上の注意は床の設置される園区が広ければ広いほどその必要が痛感されるものである。広い地に複雑な形の床を設けてみても、また同一床に種々雑多な種類を植込んでみても、園区全体が醸し出す感じには人に訴える力

が少く、落ちつきを失い、かつは人心をいららさせるといふ不結果を招く。

つぎに境栽の植込みであるが、これは原則として宿根草を植込む。そして一年花床のごとく屢々株を交替せしめるといふのではなく、その場所でも年々開花せしめるのが建前である。したがつて一年草花床は色彩的に明朗、快活、あるいは煽情的である一面、一時的で永続感に乏しいの對して、境栽はそれより重味があり、洪きを有している。境栽の植込における色彩、草丈の變化の点に關しては前述した。ここでは根本の群植を建前とし、したがつて草姿ということが問題となるし、葉形、葉色等も目立つてくる。しかし最も大切なことは、植物の種類がその土地及び氣候に適しているかどうかといふことであつて、長期間に亘つてそこに生育繁茂するものであるから生育上いささかでも不適當な条件があれば到底よい境栽とはなり難い。したがつて境栽に当てられるべき土地に応じて適當な種類を撰択するのが先決問題である。

境栽の植込みもいろいろのものを集めてきてこまごまと植えてはいけない。色彩的にもちらつかないよう、一色調から他色調へ漸移するごとく、似た色彩の數群をもつて大きく植込んでゆく。また各群の植込株も極く上等なもので目立つ種類では一株といふこともあるが、普通は數株、小形のものでは十株以上を一群として植込む。そして花期の同一のものが一方に偏るといふことなく、なるべく全延長に亘つて花期が分配されるようにする。植物には円形に育つ



ものと箒状に高くなるものとあるから、これらのものも形の上から対照がとれるように植込んでやるのが望ましい。葉の美しいものは長期に亘つて觀賞価値があるから、みぶよもぎ、しますすき、セラステウム、ぎぼうし等は好個の材料として取入れうる。境栽はその植込幅と長さの関係を考へる必要がある。前にも述べたように、境栽は全体が四季を通じて美しいということが難しいのがとにかく欠点であつて、花期を終えた部分は汚いものである。したがつて、ある程度延長が大きなり、植込群の数が多しということが望まれる。前後の植込群の重りから、普通境栽の幅としては八尺以上を必要とする。この八尺の幅に対しては、長さは五十尺以上を要し、それ以下では境栽の感じがでこないということになる。延長が大きくなると、これに伴つて、草丈あるいは色調の變化の点で同じ調子が繰返されるようなことが起きてくるが、これは蓋し已むを得ないし、また、それほど支障はきたさない。

つぎに、ここに掲げた設計例について一言説明を加えておく。第一図はアメリカの北部玉蜀黍地帯に見られる農家の庭の一つの型である。街道に沿つて約四千五百坪の方形の地を劃して庭を構成している。北及び西の境界は、冬の季節風に対して常緑樹をもつて植込み、防風帯を形成せしめその中に住居、畜舎その他の建物を図のごとく配置、家畜の運動場、果樹園、觀賞園を筆者の修正によつて示してある。觀賞園は約二百坪取り、住宅の東側の敷地をこれに当て、この中に住宅の東側の縁側から真東に向う線を軸として、ローンを主体として一年草花植込床をローン内に箆め込み、その先に左右に境栽を設け、その見透線の終点に藤棚を設けた。藤棚の左右はやはり境栽としてある。觀賞園と街路及び入口からの引込み道路との境界には低い常緑樹によつて生垣を作つてある。

第二図は境栽植込みの一例を示したものであつて、植込みの前線は平石あるいは煉瓦のごときのものでローン面と区切つてある。これは外観上もきまりがついて良いし、またローンと床の植物とが互に扨り合ふのを防止する上からも上策である。第二図の下の三つの図は上図に植込まれた植物が開花する時期別に分けて描いたもので、斜線の部分がその時期に開花しているものである。

最後に觀賞園に植込む植物について主なもの掲げておきたいが、これは現今すぐぶる多種多品種になつていて、また年々新品種が海外より紹介され、また品種改良の結果作出されている。これらは植込んで美観を呈せしめると共に、また植物知識向上のためにも裨益するところ多く、児童の教養上から言つても誠に望ましいものである。かくして家人が幼きも、老年者も共に植物を植栽、培養し、日常生活の伴侶としての花卉の日に新たな美しさを、あるいは坐して觀賞し、また庭に出で団欒するならば、単調に陥り易く色彩的に乏しい農家の生活に、どれほどの潤いを与えてくれるか測り知れないものがある。

一 花床用植物

(1) 春花床 ① 球根類—クローカス、スノードロップ、ヒヤシンス、ムスカリ、スイセン、シラー、チュウリップ。② 一年草—ヒナギク、カムバヌラ、ワスレナグサ、パンジー。③ 宿根草—アリッサム、アネモネ、アラビス、オーブリチヤ、西洋サクラソウ、モスフロックス。

(2) 夏、秋花床 ① 球根類—百合類、ダイリヤ、グラジオラス、カナンタ。② 一年草—アゲラタム、アリッサム、キンギョウウ、ペゴニア、エツギク、セロニア、ハゲイトウ、ナデシコ、デイモルフオテカ、ゴーラ、ゴデチア、リナリア、イペリス、ロベリア、トレニア、ウオールフラワー、ベチユニア、百日草。③ 観葉物—セラチウム、シネリアアマリチマ、コキア、リチヌス、トウモロコシ、アブチロン、アキランス、アルターナンセラ、メセンブリアンテマム、コレウス、フクシア、サントリナ、セダム、スターキス。

二 蔓性植物

キツタ、ツルグミ、ツルマサキ、スイカヅラ、ムベ、ビナンカヅラ(以上常緑)、アケビ、アメリカヅタ、カザグルマ、ツタウルシ、ツルウメモドキ、ツルバラ、レンギョウ、ブドウ、ニシキツタ、フジ(以上落葉性)、アサガオ、ヒルガオ、ヨルガオ、ヘチマ、カナムグラ、エンドウ、フジマメ、スイートピー、ノーゼンハレン、ハナナメ。

三 花木

ウメ、モモ、サクラ、カイドウ、レンギョウツ、ツツジ、ザア、ボケ、ユブシ、モクレン、アジサイ(以下十一頁下段へ)